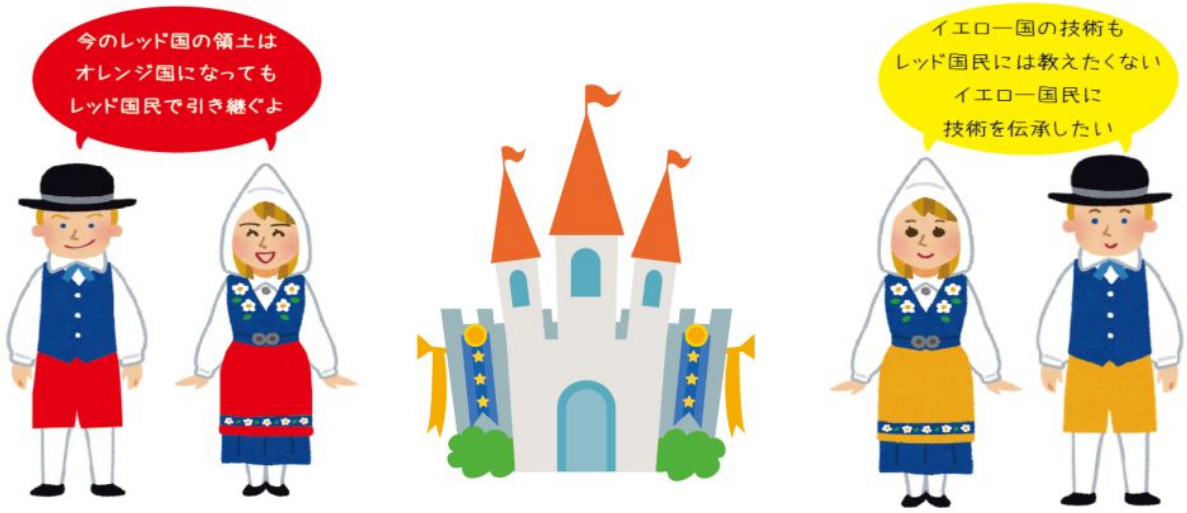
パルシティ江東通信　vol.9
オレンジ国建国記



ある遠い世界のこと。

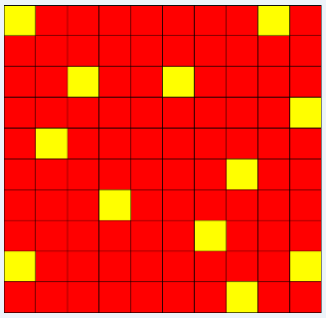
その世界にはイエロー領とレッド領があり、それぞれの領民は相手の領民にはない技術や能力を受け継いでいました。その技術や能力はお互いにとってなくてはならないものだったので、二つの領民は、これからは二つの領土に分かれて生活するのではなく、協力して一つの国家『オレンジ国』を作ろうという話になりました。

イエロー領民も、レッド領民も、『オレンジ国』を誰もが幸せに暮らせる素晴らしい国にしたいと心から願っておりました。でも、いざ一つの国を作るとなると、良い国にしたいという同じ思いを持ちながら、二つの領民はそれぞれに自分たちの技術は自分たちだけで守りたい、相手の領民には自分たちの領地には入ってきて欲しくないという気持ちを持つ人もいました。

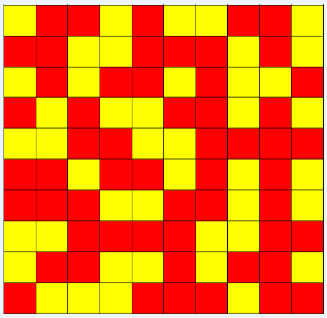
そこで、代表者 100 人が集まって『オレンジ国』をどのような国にするべきかの話し合い『代表会議』を開催することになりました。

さて、下の絵が『代表会議』に参加する１００人を出身領別に色分けしたものです。

【代表会議Ａ】



【代表会議 B】

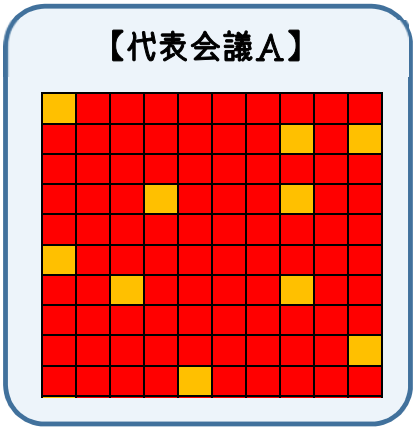


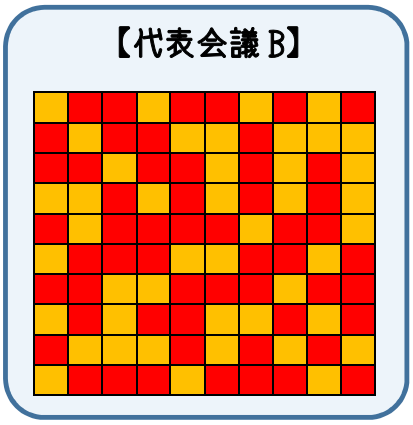
下の質問について、皆さん考えてみてください。
１）「代表会議 A」では、イエロー領民とレッド領民、どちらの意見が通りそうですか？
２）「代表会議 B」では、イエロー領民とレッド領民、どちらの意見が通りそうですか？
３）どちらの絵の方が、より公平な話し合いになると思いますか？
３）あなたがイエロー領民だったら、どちらの「代表会議」が公正だと思いますか？
４）どちらの代表会議の方が、より良い国ができると思いますか？

＜続く＞次号は解説編です！

パルシティ江東通信　vol. 10

ある遠い世界のこと？実は、身近な世界のお話です。





前回、レッド国民とイエロー国民で「オレンジ国」建国のため代表会議を開く際、右の「代表会議Ａ」と「代表会議Ｂ」の２つを比べて、どちらの意見が通りそうか、どちらがより公平か、どちらの方がより良い国ができそうかを考えていただきました。

おそらく、多くの方が「代表会議Ｂ」の方が公平で良い国ができそうだと感じたのではないでしょうか。特に、自分がイエロー領民だったとしたら、「代表会議Ａ」では自分たちの意見が通らず不公平感を感じると思います。

実は、この「代表会議Ａ」のイエロー領民の割合は、現在の日本の国会議員の女性比率（9.5%）と同じになっています。そして「代表会議Ｂ」のイエロー領民の割合は、スウェーデンの女性国会議員比率と同じ(43.6%)です[1]。

現在、日本の国会議員の女性比率は先進国の中で最下位です。世界経済フォーラムが発表する男女平等指数を見ても、日本は 142 か国中 104 位とかなりの下位に位置しています[2]。一方、上の「代表会議Ｂ」の例で挙げたスウェーデンは、同じ男女平等指数では 142 か国中４位です。他にも、男女平等指数第 1 位のアイスランドの国会議員の女性比率は 41.3%、第 2 位のフィンランドは 42.5%、第３位のノルウェーが 39.6%と非常に高い割合となっており、国の意思決定機関において女性がどれだけ自分たちの声を届けられるか、反映させられるかは、その社会の男女平等の度合いの重要な要因なのです。

『オレンジ国』建国に際して、イエロー領民もレッド領民も、どちらも「より良い国を作りたい」という思いは同じでした。お互いに相手にはない能力や技術を持っていて、それらはお互いにとってなくてはならないものでした。それなのに、どちらか一方の領民の意見だけが通りやすい「代表会議」に基づいて国が動かされるのであれば、それは『オレンジ国』が、全ての領民の願いである「誰もが幸せに暮らせる素晴らしい国」になるためには、あまり良い状態ではないと思いませんか？

日本でも、国会議員だけでなく、都道府県や市区町村レベルの議員や、民間企業で責任のある職責にある女性の数などあらゆる分野において、日本の人口の約半数を占めている女性の声が届けられ反映されるようになることが、女性にとっても男性にとっても、より住みやすい社会を作ることへつながるのではないでしょうか。

---

[1] 列国議会同盟（IPU）『Women in Politics 2015』より抜粋。日本は両院合わせて9.5%、スウェーデンは43.6%（いずれも2015年3月6日現在）。
[2] 世界経済フォーラム（WEF）『The Global Gender Gap Report 2014』より抜粋。